

2004年生田緑地内ソメイヨシノからのナラタケモドキの再発生

佐藤大樹*¹・小山明人*²

Re-appearance of *Armillaria tabescens* basidiocarps in 2004 from the same cherry tree roots that yielded the basidiocarps in 2002 and 2003 in Ikuta Ryokuchi Park, Kawasaki, Kanagawa, Japan

Hiroki Sato and Akito Koyama

緒言

生田緑地において、2002年、2003年と連続してナラタケモドキ(*Armillaria tabescens*)が、ソメイヨシノの同一の2本の木の根元から、同じ時期に発生した(佐藤・太田2003; 佐藤・太田・吉田 2004)。2003年の発生時には、一方のソメイヨシノの枯死を確認した。寄主木の枯死後も子実体を形成する病原体の場合には、何年程度子実体が発生し続け、担子胞子による分散を行うかを記録することは病原体の性状を把握する上で必要と思われる。本年も、昨年と同じ調査木において、ナラタケモドキ子実体の発生の有無と、桜の木の枯死の有無を記録する目的で調査を行った結果を報告する。

調査方法

調査日 2004年9月3日から9月15日

調査木 桜1、桜2 (2003年に枯死)。佐藤・太田(2003)、佐藤・太田・吉田(2004)で調査したものと同一木。

調査項目 子実体の出現の有無と時期、桜1の樹勢調査。

結果

9月3日。桜1は、本年も枯死しなかった。本調査木は、約10m離れた近隣の健全なソメイヨシノの葉の茂り具合と目視で比較した場合、差異は認められなかった。しかし、大枝4本の内、1本は健全であったが、1本は2002年にすでに枯死しており、残り2本の枝では先端部が枯死し、地上方向に伸びた小枝では落葉と枯死が認められた。上方に伸びた小枝は健全な枝と同程度に葉をつけていた。

ナラタケモドキ子実体が株状に、多数木の根元に認められた(図1)。昨年枯死した桜2の根元にも多数の株が認められた。9月15日にはすべての子実体は枯れた。

考察

生田緑地において3年間連続して同じ時期に同じ木からナラタケモドキ子実体が出現した。本菌は子実体発生



図1. 桜2の根元に発生したナラタケモドキの子実体(*Armillaria tabescens*) 2004年9月3日撮影。

時期を決定している何らかの引き金を持つと考えられる。その解明のためには発生動態と環境要因をともに長期に記録する必要がある。

昨年は2本の調査木の内1本が枯死したが、本年、残された桜は枯死しなかった。本菌の病徴として、根および樹幹基部が犯され、地上部の異常は枝先の枯れから始まることが報告されている(金子・小川, 1983, 1998)。今回桜1で見られた枝枯れは、この病徴に一致し、ナラタケモドキによる病気が進展していることを示していると考えられる。

本菌は、公園などのある程度管理された場所に発生する傾向があり、コナラ、クリ、アラカシ、ウメ、ヤマザクラ、ネジキ、ツバキ、ユーカリ、コウヨウザン等に感染することが知られている(金子・小川, 1998)。

今後、調査木の枝枯れに注目し病状の変化を記録するとともに、本菌の園内の他の樹種への感染を注視する必要がある。

本報告をまとめるにあたり、森林総合研究所太田祐子博士に貴重なご助言を頂いた。記して感謝申し上げる。

Summary

Basidiocarps of *Armillaria tabescens* were observed on the roots of both a dead and a live tree (*Prunus yedoyensis*). These basidiocarps appeared every early September of the last three continuous years.

*1 森林総合研究所九州支所

*2 川崎市青少年科学館

引用文献

金子周平・小河誠司（1983）ナラタケモドキによる樹木の病害. 森林防疫32: 7-8.

金子周平・小河誠司（1998）福岡県におけるならたけもどき病の発生. 森林防疫47: 164-168.

佐藤大樹・太田祐子（2003）生田緑地で観察されたソメイヨシノのナラタケモドキ病. 川崎市青少年科学館紀要(14): 5-7.

佐藤大樹・太田祐子・吉田三夫（2004）生田緑地内ソメイヨシノからのナラタケモドキの再発生. 川崎市青少年科学館紀要(15): 9-10.